

が所に養ひ置きて、先々口入を以て爲有付、召仕ふ家來迄も憐愍する事他人に越えたり。或時銀八と云ふでつちを召置き、以來は主家の足輕などにも取立可申所存にて有りし。銀八悪ぐるひ口答へなどするを、人々叱れば、さなしかりそ、あれも人の子也といひしとぞ。中西は御屋形衆として、長家にて別盡の士にて武功の家なれば、摩兵衛元より武道に達し、其由緒も田原藤太秀郷の後胤にて、器量骨柄尋常ならざれば、又三郎殿御加恩もあるべき御沙汰なりけるに、享保元年十二月六日又三郎殿御角入の節、盃頂戴して御取肴被下候座より煩ひ出し、乗物にて下宿し、其日病死しけり。此子權大夫に跡目百五十石無相違賜はり十二年保今摩兵衛と名も改め、子孫今に繁昌せりとぞ。

○小川久木夫居邸傳話

咄隨筆に云ふ。長九郎左衛門殿家士小川久木夫は、下屋敷の内御荷川の邊りに宅あり。享保の初、家内の器財を失へる事度々也。盗人の業にてもなく、眼前にある物日毎に失せけり。いかさま是は、此川筋に古き瀬居て化けると聞くが、件のなす業ならんかと、眞福院を請待せり。法印來りて壇

を飾り、眞言の秘印を結び、懷中より伽羅を取出し、是は變化の恐るゝ香なりとて、壇上の香爐に焼かれけるに、香爐共になし。是はと云ふ内に數珠もなし。扇も失せける故、壇を破りて歸られけり。同家中に小川久左衛門とて、關流小太刀の名仁あり。秘術に精進太刀とてあり。潔齋して此秘術を行ひければ、夫より不思議は止みけるとぞ。平次父が話に、文化年中大聖寺の藩士某、劔術家關九郎兵衛へ入門し、冬連日稽古、毎日稽古所へ出座し、晚景大聖寺へ歸る。或夜手取河原にて狼數疋出で害をなす。故に秘術の精進太刀を遣ひけるに、狼共悉く退去せり。彼藩士秘術の靈驗を感服し、師恩を謝せん爲め手取川より引返し、關氏へ來り謝言を述べて、再び引返しけりとぞ。予父即ち同門弟にて、現在見聞すと。其の姓名も聞きたれど今忘失せり。

○長下邸之林檎

龜尾記に云ふ。長氏の下邸四ヶ所ありしが、四ヶ所共に林檎を産す。海内一の美産地也と、世人譽つて稱美す。花の頃より實のなるまでは、採菓師木の心に竹を建て繩をかけた、鳥の愛をさけしむ。其形容船に似て、あたかも湊の如

し。といへり。今に至り、穴水町の地および北の家中と呼ばたりし地等、皆林檎の木を多く植えて、其の實を賞美す。故に世人の諺にも、長のりんご、村井の柑子といひて、昔より其の名高く、市中の名産とす。

○下安江村跡

舊傳に云ふ。昔は上安江の村落は、安江町の地にあり。故に町名に呼べり。下安江の村落は、今いふ穴水町の地にあり。然るに慶長年中兩村共に今の地へ移轉を命ぜられたりと。安江の邑傳に、昔は上下兩村共に大村にて、上安江村は村高千三百石餘也。然るに今は田地甚だ些少に成りたり。下安江村は長家の下邸の地より移轉し、是も村地多分町地と成るといへども、村高は今に至り多し。故に村落の戸數も多しといへり。

○安江住吉社跡

此の社は下安江村の産土神にて、昔下安江村穴水町の地にありし頃は、社祠も此の地にありしが、村落と共に移轉せり。故に今も穴水町の地内數戸、彼の社を産土神とす。其の社跡と傳承する地二ヶ所ありて、何れを正跡とするや詳

からずといへり。蓋し柴野美啓の龜尾記には、長家士神保與兵衛といふ人の居邸の庭内に古木の松あり。是安江住吉社の跡なりといひ傳ふ。とあり。右邸地は今穴水町二番丁にて、此の邸地の横なる川を限り、西の方は三社町三社の産子とすれば、此の地に往昔は社殿ありたるなるべし。右社跡の松も近く風折して伐取り、今はなしといへり。

○安江次郎盛高居址

龜尾記に云ふ。今枝氏の下邸の地より、長氏の下邸上家中に居住する坂井紋兵衛・加藤與左衛門・杉本・神保等の邸地へかけ、昔は一區畫の地域にて、安江次郎盛高が居館の遺址也と云傳へたりと。今按するに、右傳説は慥なる證據ありての事なるか、其の據を知らず。三州志には、今安江村の領に古城跡と云傳ふる所あり。若しくは盛高の住地なるかといへり。今按するに、今の安江村は、上下兩村落共に慶長年中に轉地せし村なれば、右古城跡といふは、元より別なる遺跡なるべし。其の上盛高の時世は、居館を構へたるのみにて、後の如く城郭中に居住するに非ず。

○安江次郎盛高傳